

第3回プロジェクト研究会③

東大附属学校における学習支援の取り組み

話題提供者 センター教授 市川伸一

2000.9.30

私の方からは、附属学校での取り組みから、学習支援に向けての提案を行いたいと思います。私はもともと認知心理学で学習や理解の問題を扱っていました。かなり基礎的な実験的研究をやっていましたが、それが教育の問題とどう結びつくのかということがなかなか見えずに歯がゆい思いをしていました。そこで、大学に地域の子どもたちを呼んで学習相談活動をするということを始めました。小・中・高校生を対象として学校の授業がわからない、あるいは教科書を読んでもなかなか理解できないという子どもたちに大学に来てもらい、私の研究室にいた人たちで個別学習指導をします。それを、臨床心理学におけるカンファレンスのようにみんなで持ち寄って、ケース検討をします。当初、学校の先生は一人もいらっしゃいませんでしたが、だんだん来て下さるようになり、一緒にディスカッションを行うことで進めてきました。

そうした活動のことを私たちは「認知カウンセリング」と呼んでいます。認知カウンセリングとは、認知的な問題についての相談や支援活動のことです。普通のカウンセリングが、例えば人間関係の問題とか、パーソナリティの問題を扱うのに対して、認知カウンセリングは、例えばコンピュータがわからないとか、数学がわからなくて困っているというような、知的な問題を取り上げます。基本的には学習や理解の問題ということになります。将来的には学校での保健室の学習版のようなものとして、この認知カウンセリングができるといいなと個人的には思っていました。

さて、認知カウンセリングというのがどんなものかということですが、人間が頭のなかで一体どんな情報処理をしてるのかという、いわゆる認知心理学でいうところの情報処理的な人間観と、カウンセリングでいわれるカウンセリングマインド、それを融合させた個別相談や指導をしたいということです。目標としては、学習者の自立をあげたいと思います。教育界ではよく自己教育力というようなことがいわれますが、認知心理学の言葉でいうと「メタ認知」というのがそれにあたると思います。自分の学力とか自分の理解状態を、自分自身が把握する、

そして改善を考えていくという力を育てたいということです。ただし、いきなりはできませんから、カウンセラーとのやりとりを通して、その教授方略を内化し、自己診断力や学習スキルをつけることをめざします。

分析の観点としては、認知心理学や教育心理学でよくいわれているような「動機づけ」、どんな動機づけをもっているだろうか、何のために学習するというような気持ちでやっているんだろうか、あるいはその人のおかれたり「学習環境」を見ていきます。それから「メタ理解」、自分の理解状態をどう理解しているか、理解を促進するためにはどうすればいいかと本人が考えているかということにも着目します。

テーマとしては、学習観とか学習方略をあげました。学習がどんなしきみで起こると本人が考えているのか、うまく学習するにはどんな風にしたらいいかという学習のストラテジーをいかに自分で考え出しているかといったテーマです。例えば、認知構造、認知心理学でよくいわれる「スキーマ」という知識の体系であるとか、あるいは「必要知識」、ある事柄を理解するための知識が欠如していないだろうかというような視点をカウンセラーがもち、それを学習者自身にも共有してもらうということです。さらに、学習観や学習動機に影響を与える状況的な要因、親や学校、友人によって協同的な学習を支援することにも着目しました。そうしているうちに、この附属のほうでもこういう個別学習支援のようなことを取り上げる必要があるのではないかという声があがったようで、私がたまたまこのような活動をやっていたこともあって、いっしょに会合をもつようになりました。

そこで、私のほうで附属に発案させていただいたことの一つが、「学習相談室」の開設ということです。気軽に相談できる場所として、この学習相談室というのがあるといいのではないかと考えました。学習方法とか学習意欲、どうしても勉強のやる気がでないとか、あるいは学習環境の問題というようなことを相談にのる、また相談だけではなく、学習内容を直接的に指導しています。

学習相談室は、昨年度の夏休みに試験的に開設した後、今年の4月から正式にオープンしたのですが、はじめの

うちは、実際に申し込んで書いてくるという子どもはほとんどいませんでした。これは、「ほっとルーム」の方もうかがってみたところ、自分で紙に書いて申し込んでくるという子は全然いないんだという話を聞いて、最初はそういうもんなんだと思いました。ただそれでも学習のことですので、何か悩み事、いわゆる人間関係の悩みとか、そういうことよりは少し来やすいのかもしれません、そのうちにポツポツと現れるようになりました。1回だけでいいという子もいれば、7回くらい継続してみている生徒もいます。

最初あまりに個別の相談の申し込みが少なかったので、少しこちらからも働きかけをしようかと、この夏休みに学習法講座というのを開きました。自分の学習方法について、見直し、いくつかのやり方を経験して自分にあったやり方をさがしていこうというのがこの学習法講座の趣旨になります。実際にやったのは英単語と国語の説明文読解で、私が英単語をやりました。英単語というのは、最初は教科書に出てきた単語を覚えるくらいなのですが、中学3年くらいになると、単語集でも買ってそれを覚えることもだんだん増えてきます。これはもう覚えるしかないということで、ひたすら書く、あるいは眺めるという子が非常に多いんです。ところが実際に英語の成績のいい子に聞いてみると、けっしてただ書くとか見るだけではなくて、いろんな工夫をしていることがわかります。これは、どんな学習方略を使ってこういう材料を記憶しようとしているかという点で、心理学的にもかなりおもしろいテーマです。ともかくいろいろなやり方があるということを知ってもらって、経験してもらおうと考えました。

実際にどんなことをやったかというと、まずアンケートで、どんなやり方でやっているのかを出し合ってもらったあとに、例えばこんなやり方でやってみましょう

というのでやってみて、その後でテストを受けるとそれまでのやり方に比べてどうだったかなどを話しあいました。ほかには、歌を聞いてそこから単語を学んでいくこともやりました。そうした、自分にとってとっかかりのありそうなことから入って、そこから単語を広げていくこともやりました。次に、自分の学習方法にどんな特徴があるのかみてみようということで、2日目には学習方法の質問紙をやっています。最後の4日目には、いくつかの本を紹介して、自分でもやり方をいろいろ探索してみましょうというような話で終わりました。

まとめになりますが、私の考え方としては、要するに学力問題、学力低下の問題を解決するときに、学校あるいは社会全体でどう対応するかということを考えた場合、一つには、授業の外にもどんなシステムを作るかを考えるべきだと思います。つまり放課後のこの学習相談室にしても、あるいは大学に地域の子を呼ぶにしても、社会のなかでいろんなリソースを作り、子どもたちがそれを利用できるようにしていくことが重要だと考えられます。それからもう一つは、授業のなかで学習方法そのものをもっと取り上げるべきではないかという気がしています。つまり内容的な知識をすべて授業のなかで教えるということは、なかなかできないのではないかと思うのです。しかも、個性化教育などというようなことになります、子ども一人ひとり学ぶ内容が違ってくるというときに、共通しているのはやはり学習スキルのようなことではないかと思われます。テーマは一人ひとり違っていても、それを学習するときのスキルのようなことをもっと授業のなかである程度しっかりと体験させたり指導したりして、そして、生徒が自分に合ったやり方をそのなかから見つけて、他の学習を内容的に学んでいくことも必要ではないかと思っている次第です。